

“将来都市像”及び“まちづくりの基本テーマ（理念）”の委員検討案

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
1	<p>『緑と伝統のかおり高い、豊かな感性が弾けるまち 桐生』 『人・自然・伝統がつながる、豊かな感性が弾ける創造のまち 桐生』</p> <p>桐生のひとたち、自然、産業や文化の伝統などのつながりの中で、市民のアイデアや知恵、創造力といった多様で豊かな感性が生き活きと弾けるように発揮・表現され、新しい時代を創造するまち。</p>	<p>「つながり」が大きなキーワード。 産・学・官、世代間、地域や、行政の中では部署間など、全ては人と人とのつながりの中で、協力し合って働きかけることで（協働）、市民1人ひとりが桐生を次代につなげる担い手という意識を持ってまちづくりを進める。</p>
2	『農山村と都市部との共存』	自然を可能な限り次世代に残す。
3	<p>『桐生まるごと博物館』</p> <p>地域の自然や有形無形の文化遺産を『桐生まるごと博物館』として捉え、豊かな地域資源に磨きをかけた街づくり。</p>	<p>『歴史と伝統、文化の息づくまち桐生』 『人・自然・文化との共生するまち・桐生』 『人・自然・光輝く文化都市・桐生』</p> <p>桐生の売りである自然環境と、伝統・文化を融合したまち。</p> <p>*東日本大震災以降、人と人とのつながりや、心のつながり等々『絆』を大切にした住民同士の助け合いや、支え合いが一層強くなり、現在策定中の、第二次桐生市地域福祉計画・地域福祉活動計画では、基本理念として、『一人一人のくらしを地域全体で支え合えるまち』を目指している。</p>

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
4	<p>SDGsを取り入れた計画に、桐生市ならではの「自然環境」を活かす。誰もが幸せに暮らし、将来に向け安心して住み続けられる「持続可能なまちづくり」には、自然環境・生活環境の安定が必要。また桐生の持つ歴史・文化から、他にはない「宝」を市民ひとりひとりが意識する。これからの桐生では、産・学・官・民すべてが協働し、パートナーシップづくりを強化する。誰もがそれぞれの役割を果たし、ひとりひとりが輝く桐生となる。</p> <p>『誰もが生き生きと暮らせるまち』 『自然とともに生きる環境にやさしいまち』 『地域活動の活性化、市民力の活発なまち』 『住み心地の良いコンパクトシティなまち』 『公共交通が便利なまち』 『歩いて楽しい魅力のある商店街があるまち』 『若者が興味関心のもてるもの場所のあるまち』 『市民に「見える化」の関心の持てるまち』 『安全安心、災害に強いまち』</p>	<p>『豊かな自然と歴史を活かしたまちづくり』 『光の都、力の都、理想の都』 『自然と文化の織りなすまち』 『資源を活かし情報発信』 『地域連携、官民連携、多業種連携、オール桐生』 『桐生未来予想図』</p>
5	<p>今日迄支えてこられた高齢者が安心して穏やかに暮らせ、これからの背負う若い人が希望を持ち元気でたくましく育つ町を目指したい。</p>	<p>『自然・創造・人 人を育む町桐生』</p>
6	<p>『“桐生らしさ”の継承と脱却』</p> <p>よいところは受け継ぎ、伸ばしていくことは重要ですが、これだけだと右肩下がりにっていくことは明らかであり、“らしさ”という言葉でごまかしてきたよくないところを思い切って変えていくことが重要ではないかと思ます。</p>	<p>『かかわる（係る）、かわる（変わる）、覚悟する』</p> <p>多くの市民が関心をもってまちづくりに係ることにより、今まであきらめてきた「できない」と思っていたことを「変わらない」と思っていたことをみんなで変えていくという覚悟をもつ。逆に、それができなければ、桐生は衰退の一途をたどっていくことも覚悟する。</p>

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
7	<p>桐生市が目指すべきなのは、①自然と共生する生活都市、②自己完結的環境循環都市、③人材創造都市でしょう。これらが目指す具体的な姿を考えてみると、次のようなものではないかと思えます。</p> <p>第一テーマ『自然と共生する生活都市』</p> <p>桐生は、山や川などの自然に恵まれていると言われていています。しかし、その自然は、天然記念物的に保護される（国立公園では、倒木は朽ちるままにされ人間が手を加えることなく、自然に任されます）ものというより、そこに住むものにより愛されて、そして生かされるよう管理（コントロール）されるべき自然ではないでしょうか。これは、市民と自然との共生と言えましょう。桐生市民の生活の背景となる自然は、市民が生活のための活力を充填できるような環境（きれいな水、きれいな空気、きれいな山や川など）を維持するために、しっかりと守られて生かされる必要があります。その中に、生活空間であるまちが存在する自然との融合都市というようなまちのイメージです。</p> <p>第二テーマ『自己完結的環境循環都市』</p> <p>桐生は、背景となる自然環境を生かし、できるだけ自己完結的に生活できるまちを目指すことで、地域からの富の散逸を防ぎ、市民が健康で豊かな生活を送ることができる地域づくりを目指す必要があります。エネルギーについては、太陽光、小水力を使った発電により、電気自動車など市民の移動エネルギーをまかなうことができます。また、里山の森林を活用したエネルギーも暖房等に活用されます。また、市内には地産地消の食料をはじめとする専門商店街が集住地域形成時にデザイン配置され、価値の地域外流出無しに生活のための良い品物が手に入るようにします。集住地域の周辺地域からも生活サービスを受けるためにラストワンマイルに困らない移動手段を官民協働により確保し、周辺都市とは、公共交通を基本としたシャトル交通で結ば、道路渋滞などのストレスや事故の危険もなく通勤・通学等の行き来も楽に可能な生活都市が実現できます。</p>	<p>『自然と共にしあわせに生きて行けるまち桐生、人を育て世界へつながるまち桐生』</p>

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
	<p>第三テーマ『人材創造都市』</p> <p>桐生は、教育機関として保育園から大学院までがそろった学園都市です。従って、ものづくりについて中高大、大学院と一貫した人材教育が可能です。また、将来起業を旨とする人材を、地域を上げて支援する体制を構築すれば、ここから世界に売れる品物も生まれ、職場の確保にもつながり、人口の定着にも寄与します。群馬大学理工学部の得意なテーマを取り上げた研究エリアの名乗りを上げることで世界からも注目され得るでしょう。地域を上げて留学生を含む人を育てる地域づくりをすることで、将来の国際都市も目指せると思います。</p> <p>生活都市としての魅力を発信して、大都市で働く人たちにも生活の場所として選ばれることにより発展するまちを目指すべきと考えます。</p>	
8	<p>経済が低迷する中、桐生の零細企業社では受注も思わしくないと聞いています。若者が働ける場所（職場）が増え、また市内中心部に活気が出ると良いと思います。群馬銀行桐生支店が本町5丁目に建築され、別棟のまちなか周遊拠点が市に貸与との事、大いに期待しています。</p> <p>桐生に活気が出て市内で買い物したくなるまちになって欲しい。</p>	<p>人生90年と言われ高齢者が増加しています。バスも市内を隙間なく巡回するのは無理であり、車を運転できなくなったら大変になります。他市町村の電話でタクシー停留所も良い事例ですね。</p> <p>また桐生市に平地の公園が少ないので、渡良瀬川の北詰の河川敷ゆっくりと散歩するだけでも気持ちのいい公園ができると良いと思います。</p>

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
9	<p>『旧桐生・新里・黒保根がそれぞれ役割を担って存続しつづけるまち』</p> <p>旧桐生のものづくりの技術、新里の農村地域、黒保根の山間地など特色あるものや地域資源を生かしたまち。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 桐生市全体で平成25年から平成30年の人口を見ると8,048人減少している。年平均にすると1,610人減っている。今まで人口が増えていたと思っていた新里でさえ減少している。黒保根に至っては5年間で300人減っている。平成25年の2,206人に対して13.6%を占めている。また高齢化率が45.9%で、小中学校の存続も危ぶまれている。 ・ 旧桐生には、松井ニットのマフラーや朝倉染布の撥水風呂敷などの技術がある。 ・ 新里には、平坦な土地があり、農地の確保も重要だが住宅地や工業団地としての可能性がある。 ・ 黒保根には、山間地の地形を生かした農産物、特にアジサイは世界的に有名。野菜などの農産物も山間地の昼夜の温度差で旨みが、平野部の物とは格段に違う。最近では、米がうまいと見直されている。ただ、最近は有害鳥獣の被害により生産意欲が低下している。 	<p>『市民・企業・行政の協力によるまちづくり』</p> <p>少子高齢化による人口減少により都市としての機能ももちろん、人口減少による市の収入減が想像できる。そこで、今の市の予算規模を維持することは考えられないので、市民・企業・行政の協力により自らできることは、行う必要がある。この部分は、総論賛成各論反対に陥る可能性があるが、そうしないと市の財政が破たんしかねない。</p> <p>『近隣市町村との連携も含めたまちづくり』</p> <p>今後の市町村合併や道州制の動きは全く読めないが、昨年、国が東京一極集中を解消する地域都市として「中枢中核都市」が発表されたが、群馬県では前橋、高崎、伊勢崎、太田が選ばれ、この4市が中心に行政運営が進んでいくことを考えると、桐生はその中枢中核都市である前橋・太田に接しているが、桐生が存続していくためには中枢中核都市の周辺としての役割を発揮するためには、みどり市との合併は避けられないのではないかとと思われる。また、新里・黒保根は大間々を核とした、中枢中核都市周辺都市のさらに周辺都市としてのまちづくりが必要と考える。少なくとも黒保根の生活圏は、大間々で日常の買い物や病院はまずは大間々となっていて、最近では葬儀場もほとんどが大間々となっている。</p>
10	<p>『未来創造 快適なマチ桐生』</p> <p>『歴史と文化とハイテクの融合 未来都市桐生』</p> <p>『自然、文化、技術が織りなす 未来都市桐生』</p> <p>『桐生は 日本の 住空間』</p> <p>『住む 遊ぶ 働く 学ぶ 未来都市桐生』</p> <p>『観る 遊ぶ 住む 快適空間桐生』</p>	<p>『自然・地域・市民との共生』</p>

	将来都市像	まちづくりの基本テーマ（理念）
11	<p>『つながりが織りなす感性豊かなまち 桐生 ～ひとがまちを創造し、まちがひとを惹きつけ創造する～』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 委員の意見が多かった「つながり」を採用。つながりは、時間軸（過去・現在・未来）、ひとと自然、ひととひと、市内地域間や市の外に広がる世界、世代間、心と心、を大事にしていくことである。つながることで、支えあい、持続可能なまちを目指していく。 ・ 「織りなす」は桐生の織物産地としての伝統をイメージした。同時に織物の鮮やかな彩色をイメージし、多様性あるひとびとをつなげることを意味している。 ・ 「感性豊か」。感性を磨くことは感受性を高め、感覚も鋭くなることにつながるといわれている。感性を豊かにすることにより、高まった感受性や鋭い感覚で、桐生にしかない本物の良い地域資源を市民一人一人が見極めることが期待できる。桐生の優れた資源に気付くことで桐生を愛し、まちに対する誇りを高めることにつながると考える。 ・ 感性豊かなひとにより、まちが創造され、また、そのようなまちがひとを惹きつけ、ひとびとの意識を創造する。新たな創造によって、新たな産業や考え方、ひととひとの交流が生まれる。にぎわい豊かな桐生が世界をリードし、世界に向けた新たな価値観などの情報発信ができる姿をイメージした。 	<p>『主体的行動、包摂性、ひとと自然の共生』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「主体的行動」。誰かに何かをしてもらうのではなく、まず、自分の立場で、できる範囲内で自分は何ができるのかを考えること、自らが人生の主人公となって、主体的に行動することが、桐生の活性化につながる。桐生はダメだとする前に、自分たちの地域は自分たちで解決する意気込みで、官民協働で動くことが、人口減少、少子化時代のまちづくりにとって一番大事なことである。 ・ 「包摂性」はSDGsの理念の1つ。まちづくりを進めるにあたって、誰一人取り残さないことを理念として掲げることは重要だと考える。元気に働ける世代だけでなく、高齢者や子どもたちが楽しく安心して暮らしやすいまちづくりを目指していく。 ・ 「ひとと自然との共生」は、環境先進都市としての矜持をもってまちづくりを進めることである。豊かな自然環境は、本物の良さに気づき、まちとひとの創造性を育むとともに、多様性あるひとびとを惹きつけるだろう。